

## 蜜のあわれ

むろうさいせい  
室生犀星

「あたいは殺されない

「おじさま、お早うございます。」

「あ、お早う、好い」機嫌らしいね。」

「こんなよいお天気なのに、誰だつて機嫌好くして  
なきや悪いわ、おじさまも、さばさばしたお顔でいら  
つしやる。」

「こんなに朝早くやつて来て、またおねだりかね。ど  
うも、あやしいな。」

「ううん、いや、ちがう。」

「じゃ何だ。言つて」覧。」

「あのね、このあいだね。あの、」

「うん。」

「このあいだね、小説の雑誌巻頭にあたいの絵をおか  
きになったでしょう。」

「あ、画<sup>か</sup>いたよ、一疋<sup>びき</sup>いる金魚の絵をかいた。それが  
どうしたの。」

「あれね、とてもお上手だったわ、眼なんかぴちぴち  
していて、とてもね。本物にそっくりだったわ。」

「頼<sup>うま</sup>まれて生れてはじめて絵というものを画<sup>か</sup>いて見た

んだよ。本当は絵だか何だか判らないがね。」

「あたいにも、そのうち一枚画<sup>か</sup>いていただきたいわ。」

「絵は画<sup>か</sup>」うとしたって却々、画<sup>なかな</sup>けるものではないよ。

君から見ると似ているかどうかね。」

「よく似ていたわ、それでね、あれから後<sup>あと</sup>に、一週間

程してから、雑誌社からお礼のお金<sup>が</sup>が書留で着いた

でしょう。」

「これも生<sup>う</sup>まれてはじめて画<sup>が</sup>料<sup>りよう</sup>というものを貰ったのだ

が、それがどうかしたかね。」

「どれだけいただきになったの。」

「文章が一枚半ついていてね、合わせて一万円貰っ

た。」

「おじさまはそれをわたくしにね、正直に仰有おつしやらな  
かったわね。幾いくら来たつて」ともね。」

「金魚にお金の話をしたつて、どうにもならないじや  
ないの。」

「だつて、あれ、ほんとうは、あたいのお金じゃないこ  
と、あたいをお画かきになったんだもん、あたいにくだ  
さるとばかり、そうおもっていたわ。」

「何だか僕もそんな気がしないでも、なかったんだけ  
ど、」

「でね、おじさま、それについてね。」

「あ、」

「もうお金、だいぶ、おつかいになった？」

「半分つかったけれど、まだある。」

「何に半分、おつかいになったの。」

「千五百円の玉露を百目買ったし、雉子羽根のはた

きを一本と、赤玉チーズを一個買った、……」

あかだま

「あたいには、とうとう、何も買ってくださらなかったわね。」

「君なんかのことは、まるで、わすれていた。」

「おじさまはずるいわね。あれ、本当をいえばあたいのお金じゃないの。」

「そういつ」とになるかね。きみを見て画<sup>か</sup>いただけで、それがきみのお金になるものかな。」

「あたい、いつ下さるか、窓の方を毎日のぞいていたのよ、で、ね、あと半分のお金、いただきたいわ。」

「一たいきみは何を買うつもりなの、」

「お友達の金魚をたくさん買ってほしいのよ。」

「あ、そうか、遊び友達がいるんだね、それは気がつかなかった。」

◆ 本テキストは、インターネット上の「青空文庫」のテキストから抜粋し、一部加工したものです。

「青空文庫」(<http://www.aozora.gr.jp/>)